



だれでも安心できる「医療・福祉をめざす」 浜松佐藤町診療所のあゆみ

小林 昭文*

はじめに

1971年県民、地域住民の切なる願いであった民主的医療機関が静岡市田町に開所されました。静岡県下初の全日本民主医療機関連合会に加盟をした静岡田町診療所です。同年、静岡県東部で地域の看護学生や地域の民主的人々によって民主的医療機関の建設運動（県東部民主診療所建設をすすめる会発足）が始まり、1978年三島市八反畑に三島共立診療所（三島共立病院の前身）が開所されました。その2年前、静岡勤労者医療協会（後の医療法人社団静岡健生会）の長期計画案は浜松（静岡県西部）にも民主診療所の建設し、県西部の民主的医療機関の拠点することが決定され、地元の民主団体や活動家らは、1978年協会の担当者とともに本格的な建設運動をスタートさせました。

建設運動

1978年4月、「いつでもどこでも良い医療を」をめざす西部民主診療所建設をすすめる会は、古い貸家の八畳二間から出発しました。1億円の建設資金を集めるため浜松市内の労働組合の執行委員会や定期大会、民主団体の役員会や肩頸腕障害患者会を訪問し診



歩み続ける佐藤町診療所
(浜松市中区佐藤 1-22-22 電話 053-465-0210)

療所建設の意義を訴えました。また、労働組合の医療講演会や地域の医療講演会を組織して建設資金の出資を訴えました。市内の各地域では個人宅や公民館で健康相談会を開き、簡易健康診断、医療相談、医療情勢の講義などをおこない、地域に根付いた医療活動をアピールするなど勢力的な建設運動をつづけました。これら活動の講師には海老原先生をはじめ、地域病院の医師、保健婦、看護婦など多くの医療従事者が参加しました。また、これから建設される診療所の医療構想をより具体的にするため、世話人会は、愛知、山梨、京都、長野など地域に密着した医療活動を展開している民医連診療所の見学や、診療所職員、地域の人たちとの懇談をおこない、これからの診療所のあるべき姿を描き出

* 浜松佐藤町診療所・放射線技師

すとりくみが幾度となくおこなわれ、着々と診療所建設運動はすすんでいきました。

職員の確保は、診療所開設後も引き続き主体的な医療活動を実践するうえで当初から運動に参加している医療従事者を獲得することが必要でした。しかし、医師の確保は非常に困難を極め、このままでは診療所は出来ましたが開所ができないこともありえる事態が考えられました。このことは、今後の診療所建設におおきな教訓となりました。

開所と医療活動

1980年3月、協会の努力で医師の配置も決まり診療がスタートしました。開所時には多くのマスコミが現代版「赤ひげ診療所」として診療所の医療方針でもあった老人・寝たきり患者の訪問看護、健康診断、育児・精神・労災相談、困窮者の医療相談をおこなう診療所として紹介されました。診療は多くの医師の協力をいただき、整形外科、精神科、胃・大腸内視鏡などの特別診療（特診）を設けました。また、海老原先生は呼吸器特診として浜松市内および近郊に居住する元鉱山労働者の塵肺診療に当たりました。塵肺診療をおこなっていることで新たな（鉱山労働者でない）塵肺患者の診察や労災認定患者が増えるなかで、診療所は呼吸器障害、頸肩腕障害治療など労災職業病を患う人たちに大きなよりどころとなっていきました。被爆者医療にも力を入れ、被爆者手帳の申請や医療相談などをおこない県内で一番多くの被爆者が診療所に通院するようになりました。一般診療のほか、物療室、鍼灸治療室を新たに設け、頸肩腕障害を患っている患者さんやお年寄りの肩こり、腰・膝痛などの治療を開始し、多くの患者が治療にきました。

慢性疾患管理は、看護部が中心となり管理基準・患者台帳の整備、中断患者への電話や訪問で、中断患者を出さない取り組みをおこ

なっていました。また、患者会の組織も疾患別に立ち上げ、学習会、レクレーションを開き患者自らが病気に向き合う心構えを作っていました。訪問看護は、診療所開所時からおこなっていました。当時は診療報酬が設定されていなかった時代でありましたが、診療所の創設理念からは当然の医療活動でした。そのなかで、社会的資源活用の必要も生まれ、福祉課や社会福祉協議会を通じて診療所MSWとの連携のもと申請、利用がされました。しかし、当時は社会福祉協議会も資源が少なく、診療所から簡易浴槽を持ちこんで入浴介助をおこなったこともありました。健康診断も診療所内をはじめ検診車による出張健診も行い中小業者の要望にこたえることができました。

1982年、佐久間町政の医療切捨てによって、そこに住む元鉱山労働者や塵肺患者は医療を受ける権利が奪われる事態がありました。しかし、塵肺医療の灯を消すなど海老原先生は地元の有志や塵肺患者らとともに西渡診療所を開所し、再び鉱山のある佐久間町で塵肺患者の診療に当たることになりました。佐藤町診療所は週一日、看護婦、事務、検査技師、放射線技師を派遣し西渡診療所の医療活動に力を注ぎました。

開所4年後には、新たな医療のとりくみをするための第2診察室、友の会室、入院ベッド（2床）、多機能部屋、浴室、断層撮影装置導入などのため新館の増築をおこないました。とりわけ往診患者や訪問看護を受けている家族の介護を一時期開放しようとデイケア委員会を設置し、学習会や他の院所見学をするなどデイケアについて学びデイケアをスタートさせることになりました。多機能部屋のデイケアは月1回5～7人の利用者をむかえ、午前は機能訓練、午後は作業療法をおこなうなど、診療報酬が認められていない時期でありながら続けたことは今後の医

療展開におおきな弾みとなりました。

この間、診療所は医療を実践していく中で市政の医療対策の遅れを実感し、幾度となく浜松市と交渉を重ねました。在宅患者の入浴回数を増やすことや胃レントゲン直接撮影の実施、肝機能検査の拡大などを実施させることができました。

1988年海老原先生指導の下、浜松医大の学生や市内の看護学校の学生たちと、国鉄浜松工場周辺地域へ戸別訪問し、アスベスト被害に関する聞き取り調査をおこないました。その後、医大生らは全国医学生ゼミナールで報告しています。診療所ではアスベスト被害の実態を細かに見るため健康診断を実施し、被害状況を確認しました。その後、それらをもとに国鉄OB会の協力を得て大々的な健診を組織するため、責任者に面談するも断られ、個別的な対応で健診を実施していくことになりました。

2004年、佐藤町診療所は建物の老朽化や介護への大幅な前進を推し進めるため全面建て替えをおこないました。診療はもちろんのこと、訪問看護、通所リハビリ、通所介護、訪問介護、居宅介護支援などを置く総合的医療・介護を担う拠点として再出発となりました。1980年の開所当時、職員10名で始まった佐藤町診療所は今では52名の大所帯となり職員一同、医療・介護の岩として日夜奮闘

しています。

浜松市佐藤町に診療所が開設されて28年、働くひとびとの医療機関として無差別・平等の医療・福祉を追求し、総合的な社会保障制度の確立と平和・民主主義の実現のため活動してきました。また、疾病の背景にある生活と労働を捉えることを重視し、労災職業病、公害・環境問題、薬害などの社会問題に取り組んできました。

私たちが歩んだ道、これからも歩みつづける道を示した浜松佐藤町診療所「医療・福祉宣言」を次ページで紹介します。この宣言は若い職員らが中心となって作られました。

1978年「医療保険制度改革要綱(案)」「健康保険医療改正案大綱」が発表された以降、患者・国民にとって受難の時代に入ってきました。老人医療費の有料化、医療費一部負担引き上げ、差額ベッドの規制緩和、診療報酬の引き下げ等等政府による弱者への攻撃は激しさを増しています。今日では、後期高齢者医療制度や介護保険制度にみられるような弱者切捨てによって日本は医療・介護崩壊にすすんでいます。

浜松佐藤町診療所は、いつでも、どこでも、だれもが、安心できる医療と福祉をめざしてこれからも歩みつづけます。